史林
第二十卷　第四號
（通卷第八十號）　昭和十年十月發行

研究

支那の青銅器時代に就いて（下）

梅原末治

八

以上述べた所の三代尊彝の形態、圖文の推移並に銘辭の變遷に對する概觀が、初に記した特色ある銅利器と如何に交渉するかは、本題の核心に觸れる重要な事項であるが、嚴密な意味からすると、今日なほ兩者の明かな共存例が示されて居らぬので、これを適確に知ることが出來ず、その如何を將來に於ける關係資料の出現に俟つ外ないのである。併し現在の許された範圍での考察として、此の場合

注意を惹くのは蓋し兩者の圖文の上に認められる同似としよう。

吾々は古銅容器の圖文に於いて嚴肅奇怪な動物文が、現在最も初に來るとする形式觀を得たのであつたが、他面に於いてその古調のある同式の動物文を複雜化した利器乃至寧ろ實用より遠ざかつた古式戈や戚等の裝飾に見受けるのであり、また款識に於ける最初の段階に屬するとした記號的の類が、同じく戈・戚等の所謂「內」に存することをも注意するのである。然らば右の同似からして云はゞ利器の裝飾化したものと銅容器の古式とが同時に存したらうとする推測が加へられることになる。此の場合所謂殷墟からかゝる利器を出すことが、同じ遺跡出土の雕牙骨片に同樣な特徵ある圖文の刻出されてゐる點と併せ觀る可く、また他方に於いて古式の尊彝の款識に、支那の金文家の認めて周初の器とするものゝあること、例へば六彝の如き或は象文彝の如きは、よしや其の推定年代になほ絕對の信據を置き難い點があるとしても、右の推測に連關する所があり、兩者の接觸點の年代觀に一の傍證となり得るであらう。

尤も銅利器のうちには既に述べた如く、狹義の戈(一部支那學者の戟)に秦始皇の年紀を刻するものを存し、また戰國代と認められる所謂鳥書銘①を存する相似た戈等があつて、これは銅矛の或ものゝ示す事實と併せて、銅利器の遙かに後の時代にまで行はれたことを物語るものとして、右の想定に牴觸する感なきを得ない。さりながら狹義の戈なり戟は、當面の古式の戈から發達したものであること既

に指摘した如く、同じ式は漢代の鐵製利器にも存するに徴し、この事實こそかへつて尊彝と利器の或物との形式の發展過程に於ける並行を示すものとも見られるわけである。なほ或器が其のものゝ長い發展の途中で、本筋と離れて、寧ろ實用より遠くなつたシンボリカルの形を生ずることも固より考へ得ることで實際形式學上戈の場合では現存の資料からでもかゝる派生が略ぼ實證される。然らば此の尊彝の古式と、一部に裝飾を加へて寧ろ實用より遠くなつた利器との同時存在の認容は、他面に於いて其の時代が所謂殷墟と結びつき得ることに依つて、それから考へられる事象が自ら從來の見解と稍々かけ離れたものとならざるを得ないのである。

古式の戈はこれを從來稱せられてゐる、戈卽ち狹義のそれに較べると、形式の上で明に先行するものであり、從つて古式なる形容詞を冠したわけであるが、それ自體に於いては既に一般のhalbardよりは遙かに進んだ形を取つてゐて、明に一程度の發達を示したものである。加ふるにいま問題に上つてゐる其の「內」に裝飾を加へた遺品乃至右の便化した類に至つては、刄部の實用に適せないものゝ少くない事實と表裏して、石器の形を銅に寫した當初の段階から、それに至るまでに利器としての發達の段階を經たことを當然豫想せしめるのである。而して此の種の利器が從來支那に近接した地域に見ることなく、他方圖文の上に同じ傾向のある戚が支那史前の有孔石斧との緊密な連系を考へ得るものであるに於いて、自ら右のより簡單な實用の利器としての發達の段階が、それの表徵する支那の古文化

の母胎のうちで經過したとする推測を導くことになる。

現在の知見に則する限り支那の古銅容器が形式學上其のはじめに來る段階に於いて最も其の特殊性が強いとする吾々の歸趨は、それが鼎鬲壺等を除いて土器との直接な形のつながりに乏しく、また圖文の甚だ特異な表出であることなどと共に之れ自體に種々の問題を藏するわけである。いま其の一つとして何が故にかゝる事象を呈したかの重要な點は、考古學上これを實證する資料を闕くが、併し古代に於いて最も普遍的な土器との連繫が左程密接でなく、また圖文自體の示すところ半ば浮彫的なものが古いとなると、腐朽し易い他の物質、例へば木竹器等のうちに、其の先行の器形があつたのではないかとする想像を加へしめるのである。古銅器のうちに例へば爵・角の如き角器から導かれたとする器や、尊の或物の如き竹筒から來たと思はれるものゝあることは此の想像を強めるものであらう。

一體木や竹などで作つた器は其の質料の性質上古いものは腐朽するので今日實物を見得ないのであるが、果實の類が早く容器として利用せられたと同じく、人類がこれを用ひたらうことはまた想像するに難くない。これを現存の土俗品に徵するも、例へば北歐の國々に於ける木製品乃至木製容器の盛なる使用は寧ろ吾々の推測の範圍を超ゆるものであり、また北アメリカの土俗品に就いても其の著例を見受ける。而して此の後者並に大洋洲の島々の木製の土俗品に支那の古銅器文に類似したと言はるゝ繁褥な動物文の彫刻を存するのである。吾々はこの故を以て問題の一部論者の言ふ如く問題の支那

の文物を是等と結びつけて、古代に於ける大平洋文化圏の存在を直ちに想定するが如き大膽さを持たないのではあるが、たゞ支那古銅器文が要するに野蠻文樣の極度の發達を遂げたものとする見解が認められる以上、此の現在の未開人の土俗の實際からして、其の始源の狀態を類推することは許さるべきであらうと思ふ。

いま右の點から試みに古銅器出現の初期の狀態に就いて大膽な想像を加へるとせんか、此の場合先づ現に遺物を存して古くから容器として廣く行はれたことの明な土器と共に、早く腐朽する物質で相似た器の作られたことを考へるとする。次に一般の容器が第一義的な日常の用器から、文化の發展に伴ひ更に別個な用途、例へば祭器等の分派が生じた場合を想像する時、木製を以てよりそれを多く作ることになつたと見る推測が許されるとすれば、其の質料に應じた形なり、裝飾文の發達が當然あり得るであらう。現存の銅容器に於いて形式學上最初に來る複雜にして特色のあるものは、かゝる別個の物質での發達過程を前提として、それを銅で寫し作つたとすることに依つて、よく理解せられるし、また其の當代の日常の土器との稍々かけ離れた事も說明し易くなるであらう。此の想像は他面に於いてかゝる木器の製作に要する器具として、可なり鋭い利器の存在を考へしめるもので、自らまた銅利器があつたとする推測をも導いて來る。既に擧げた樣に古代世界に於ける銅容器の出現は、技術の進步と共に通じて銅の產出が豐富を加へて、これが最も必要な日常の利器製作の需要を充して過剩

となるに至つた際、或は更に利器の質料としてより優れた金屬卽ち鐵の發見があつて後とする事實が、こゝでまた顧みられるのである。

現存の資料に基く特色のある利器と銅容器との接觸併存點と、それに附隨した如上の推測が認められるとすれば、こゝに從來別々となつてゐた古代銅製品が一の體系のうちのそれ〴〵の部分を占めることになつて、利器を觀點として銅容器の位置を推し得ることになり、廣く行はれてゐる古代文化發展の一過程としての銅器時代なる概念から、問題とする支那の銅器を論じ得るわけになる。右の歸結として銅容器の出現した時には、銅利器が一程度の發達を遂げ、其の或物には著しい特色が表はれてゐたのみならず、他面それから既に器の裝飾化乃至便化が行はれて、兩者の並行したことから推し、右に先立つて、そのこゝに至る眞の銅利器の行はれた時期の存在が想定せられるのである。この想定こそ繰返して述べた特色ある銅容器の製作を合理化するものとする。然らば支那の銅器時代は此の意味で新たに見なほさるべきものであつて、考古學上の一般の通念からすると、右の眞の銅利器のみの行はれた時代が問題として先づ取り上げらるべきであらう。今日はなほそれに就いての確實な資料を闕くとは云ふものゝ現實の銅容器の性質の如きも前者の認識から出發して、はじめて正しく其の性質が把握せられるものと思ふ。③ こゝで銅利器の或物が形式化し、他方銅容器の表はれた時期の實年代が改めて顧みらる可く、それは既に隨所で觸れた樣に河南省殷墟の示す事實からして現在殷の後半に比

定する蓋然性が多いのである。

河南省彰德府外の所謂殷墟が、傳ふる如く殷の後半のものとするに就いては、今日なほ疑念を懷く人士が絶無ではなく、また從來發見の種々の出土品を以て一部學者の云ふ如く、右の殷代の所產と解するに就いては問題を存することである。併し彼の龜版獸骨に刻した貞卜文を以て、すべて後代の僞刻にあらざるやを疑ひ、或は自家の家說に立脚してこれを戰國代の遺品と見るが如き極端な人士を除くと、④今や學界の大勢はこれを以て傳稱の時代の遺跡と認めようとするの傾向を示し、發掘調査に依つて示された種々の遺物の混在に就いても、右の見地から本來の類を檢出する方案が考へられてゐて、⑤それが近時の發掘調査の齎した事實に依つて新しい光明を投ずるの機運に際會してゐる。⑥果して然らば同遺跡の示す所と如上の遺物との連關からして、支那の青銅器時代は、殷の後半以前に、殷墟出土品に見るが如き形式化乃至明器化したものゝ據る所の眞の銅利器の行はれた時代があり、其の發達が同代に入つて容器の出現を見て、其の所產の上に新しい色彩を與へたと解す可きことになる。殷墟出土品に最も著しい龜版獸骨に刻された文字の出現はまたかゝる文化の發達にふさはしい一の現象と見られるのである。李濟博士が其の『安陽發掘報告』第四期に於いて、殷墟文化是多元的と云ひ、また是進步的と記してゐるのは、同址出土品の殆んどすべてを殷代と見てゐる點も遺跡の實際上から首肯し難い部分を含むも、同代文化の可なり進んだ段階にあつたとする所右の吾人の所見に合致するので

ある。

【註】

① 容庚氏「島書考」(『燕京學報』第十六期)「同補正」(『同誌』第十七期)參照。

② 此の種の文化說に就いての邦人の手に成るやや經つた述作には故榊原政職君の「北太平洋文化說に就いて」(『民族と歷史』第七卷第三—第六號)がある。

③ 其の行はれた地域に依つて古文化の發展も特殊の相があるもので、それが人智の進むに伴うて顯著なものゝあることは多言を要しない。此の見地からすると銅容器の如き支那の場合其の著例をなすものであらうことは吾人の信ずる所であるが、併し其の點を明にするには先づ以て、一般に認められてゐる古代文化發展の段階が、此の國に於て如何なる經過を取つたかゞ、同じ基準の上で確められることを要する。本文の所論は右の點を論じたに外ならぬ。誤解を避ける爲に註記して置く。

④ 飯島忠夫氏「干支のの起源に就いて」(『東洋學報』第十六卷第四號、第十七卷第一號)、同「殷墟文字の年代」(同誌第二十一卷第一號)等。

⑤ 梅原『殷墟出土白色土器の研究』(東方文化學院京都研究所報告第一册)參照。

⑥ 梁思永氏「後岡發掘小記」(『安陽發掘報告』第四期)參照。なほ最近同地を視察せられた佛國ペリオ教授の實見談に依るに、同地侯家庄で調査中の數基の古墳の示すところ、殷代の後半と認められると云ひ其の內容は一層この可能性を考へしめるもので、詳細な報文の發表が期待されるのである。

九

殷の後半を以てかゝる文化の段階に屬するとなし、其の以前に銅利器の行はれた時代があつたとする私見は、初に擧げた從來の學說と少なからず背馳するものであつて、特に嚮に公にせられた銅利器

分析の結果同代を以て石金過渡の時期に當る純銅時代たることが確證せられたと云ふ見地[1]とは合致せない、從つて此の問題が當然考察せらるべきである。さり乍ら化學分析に基く如上の所說に對しては別に開陳した鄙見に指摘し置いた如く、[2]分析の示す資料が純銅であるとする結果に何等の疑を挾むべきものがないとしても、純銅の器の作られるのが純銅時代に限られたと云ふ證明がない以上、それのみで支那の文化段階を規矩するが如き重大な歸結は直ちに導かれ得るものでなく、かゝる立論に當つては種々の點が考慮せられなければならない。況んや分析の結果は錫こそ殆んど含まれてゐないが、多量の鉛をはじめ他の金屬が加へられて居り、一程度の合金術の發達を示すものがあり、云ふ所の石器使用の次に來る純銅時代の所產と解するに其れ自體ふさはしくないに於いておやである。

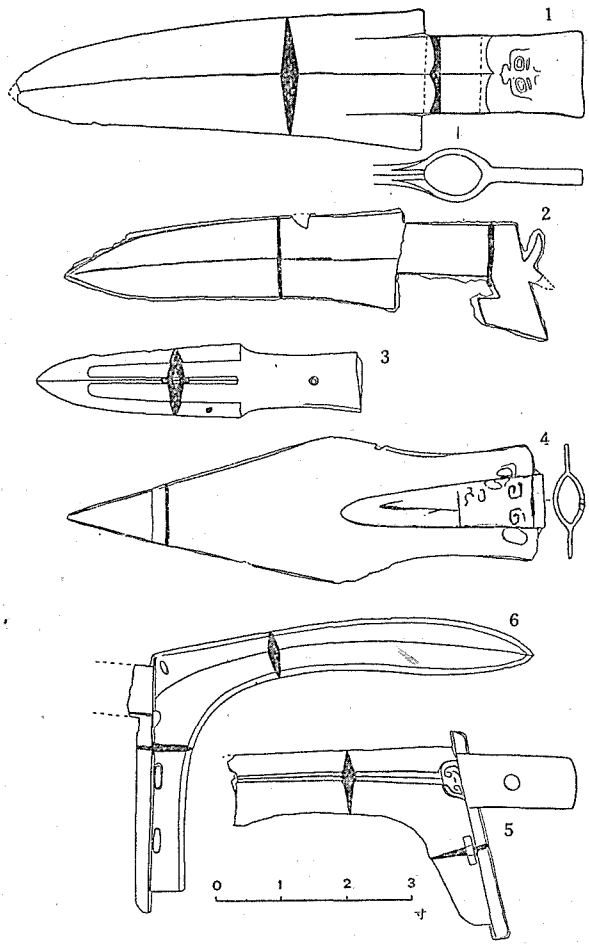
銅器の質料の化學的研究が、其の性質を考へる上に重要な分野を占めることは夙に濱田博士の提唱せられた所であつて、[3]從來既に、銅鏡、銅鐸、銅鏃、泉貨等の成分の調査が行はれて、興味ある結果が發表されてゐる。銅利器は尊彝と共に如上の類に較べて、より重要な意味を持つものとして、其の調査が大いに期待されるものである。さり乍ら、是等の分析の結果を以て、器自體の成分の何なるかを明にするに滿足せず、當代の化學知識を推し、或は該所產の依つて來る文化の性質を確めんとするが如き考古學上の命題の論據とするには、豫め分析に供する資料に對し充分なる考古學上の調査を加へて、そのものゝ實體を明になし置くべきであり、また能ふ限り資料を多くして、結果の確實性を期す

可く、更にかく性質の分つたものに就いて形式學上連關した一群の同種の器を取つて成分の異動如何を見ることの用意も必要である。是等の準備調査があつて始めて分析の結果が問題の立論に妥當性を持つことになると信ずる。學界の現狀では、なほかゝる企圖を實行するには困難を伴ふことであるが、研究者はまさに其の實現につとむべきである。處が上に擧げた歸結を得られたとする銅利器の分析には、其の點に關する考査が頗る不充分で單に殷墟出土と傳ふる利器を取つて、器自體の示す形式等に深く留意することなく、若干の器に殆んど錫を含まないと云ふ結果にのみ重きを置き、うちに含まれた他の成分等を顧みられなかつたことは、其の立論に對し危惧の念なきを得ないのである。

京都帝國大學教授小松(茂)博士の發意に依つて昭和五年に着手した同博士並に山内(淑人)博士と吾人の支那古銅器の化學研究は、豫め右に擧げた考古學上の用意を以てした資料に就いて調査考察を進めたものであつて、先づ古鏡の研究成り、最近銅利器に就いての第一期の調査を終へ、今や尊彝の類に及ぼしてゐる。④而して其の銅利器に關する所見が、恰も本問題に連關して、從來の結果との間に一の興味ある事實を示し、その解決に資す可きものあるを見るのは欣快とする所である。此の研究の結果は他日正しい形に於いて公にせられる豫定であるから、詳しくは其の發表を俟つべきであるが、いま簡單に其の重要な點を擧げるならば、分析調査を經た二十六點中、所謂戈の類、十三點、矛八點に於いて、明に實用に供せられた器と、形式化して明器であつたと認められる器との間に成分の上に著

しい差異があり、また同じ實用に供せられた器にあつても形式に應じ成分に變遷を示す樣に見ゆることである。卽ち前者では實用の利器が概して適量の錫を含んで居るのに對し、明器的なものはこれを缺き、代へるに多量の鉛を含み、更に鐵と砒素とを加へてゐるし、また後者では、形態の發展と共に主成分たる銅錫の外に漸次鉛が加はつて行く事實とする。尤もこれは、未だ二十六例からの歸納であるから、將來分析例を增した場合或は違つた結果が出るかも知れぬ。併し考古學上から見た器の性質と成分との間に於けるかゝる連關は此の場合單なる偶然と看過するには餘りに顯著である。

第二十圖　分析した支那古銅利器類形式圖



いま例に就いて其の實際を示すに第十二圖1・2に示す兩種の戈、並に3・4の矛(鉾)にあつて、次表の如くその各個の間に成分の差異を見るが、通觀すると1と3とに共通點があり、また2と4とに合致した所がある。而してこれを考古學上よりすると1・3は實用の利器たる條件を具備するに對し、他の二者はこれと違つて明器的な性質に屬するもので、共に殷墟出土と傳へられて居り、器形と質料との間に密接な關係を示してゐる。

	戈(瞿形) 1	戈 2	矛 3	矛 4
銅	八五・二六	七八・七〇	八〇・六三	七三・九四
錫	一三・八六	〇・一三	一七・三三	〇・一二
鉛	〇・一三	一八・〇九	〇・一八	一六・九二
鐵	〇・二六	一・一二	〇・三〇	一・一九
ニッケル	—	〇・〇七	〇・一二	〇・一三
砒素	〇・一〇	一・六五	〇・一一	〇・九八
アンチモン	〇・〇五	—	〇・一四	—
硫黄	—	〇・二二	—	〇・五〇
計	九九・六六	九九・九八	九八・八一	九三・七八

次に右の1の戈並に圖の5・6に示す二個のそれ〴〵違つた形式の戈にあつて、其の成分に差異のあること次表の如く、形の發展に伴うて鉛の分量の多くなる並行事實が示されてゐる。而して同じ傾向は時代の下る他の器に於いても認められるのである。

	戈 1	戈 5	戈 6
銅	八五・二六	八四・八五	七六・〇六
錫	一三・八六	九・九七	一二・〇三
鉛	〇・一三	三・五一	一〇・八九
鐵	〇・二六	〇・一二	〇・四三
ニッケル	—	〇・〇七	〇・〇八
砒素	〇・一〇	〇・四〇	〇・四四
アンチモン	〇・〇五	〇・四三	〇・二〇
計	九九・六六	九九・三五	一〇〇・一四

右の分析の結果から改めて從來發表せられた銅利器の成分を檢するに、道野鶴松氏の分析に係る殆んど錫を含まないと云ふ器は[5]、大體に於いて考古學上明器的な性質を備へた點で、如上の戈2、矛4等と合致するものであり、成分の示す特徴また相近いし、他方近重博士の調査に係る實用[6]に供したと

見てよい戈並に戚の類は戈の1・5・6矛3等に相似た成分を示して青銅の器であることが注意せられて、右の形式に依る成分の差異の偶然でないことを裏書きするものがあり、一層の興味を加へる。

支那の古代の利器がかく成分の上から二大別し得て、其の一方の實際的な利器が青銅質から成り、前者から導かれた形式の便化した明器的なものに錫を殆んど含まないとなると、從來の後類を若干例檢したのみで、直ちに純銅器時代の存在を確認し得るとなすことの早計なのは自ら明であらう。如上の成分の示す遺物に於いて考古學上2の如き明器から1の如き實用の器が生じたとは到底云ひ得ない筈であるし、また道野氏の分析した「內」の著しく裝飾化したものや更に形の便化した類が形式學上より簡單な實用的の式の後に來る可きは、第一圖に載せた形式發展圖の明示する所で多言を要しない。此の場合更に右の明器として作られた器の示す成分自體が考査せらる可きである。既に繰返した如く、從來は是等の成分中に殆んど錫を含まない點のみが重要視せられてゐるが、通じての成分の上で同樣注意すべきは、鉛分の多いことである。其の多量の鉛は固より夾雜物と解し難いから、これを加へた所以が當然考慮せらるべきである。鉛はそれ自らの性質上、銅との合金として古くから用ひられてゐてこれを加へることに依り

(一)青銅の場合にあつては氣孔を減じ、健全なる鑄物たらしめること

(二)鑄造に當り湯の流れをよくして、綺麗な鑄物を作り得ること

(三)鑿、鏨及び鑢等を以て加工し易くなること(これは鉛が入つた爲に合金に粘性を減ずるに依る)の效果があるとせられ、更に純銅の場合にあつては其の熔融點を低くすることが知られてゐる。⑦して見れば特に鉛を加へたのはかゝる化學的知識に基くものと解すべく、是等の場合主成分が純銅の鑄物である點で、其の熔融度を低下する目的であつたことが推されるのである。

右の鉛と共に擧ぐ可き成分に鐵と砒素とがある。上記の二例では其の分量は共に一パーセント內外であるが別に分析した二個の同樣な明器では、其の分量が一は鐵一・二三、砒素四・四九、他は〇・八九と一・二一あつて相似た狀態を示してゐる。海外の純銅器に時に相近い分量の鐵を含んだものがあるので、これは單なる夾雜物かとも思はれるが、他方二十餘の實用的な銅利器に於ける夾雜物としての鐵が最大〇・四で大半は〇・二以上に出でないことを省み、なほ別に此の類に等量以上の砒素を含むことから、分析者山內博士はそれを以て特殊の添加と解すべきものとせられた。而して同博士は、化學上から見て、此の二元素を加へることは純銅の質を固くするに役立つもので、其の點錫と相似た效果があることを敎へられた。然らば、錫を含まない器の成分にのみこれを存するのはかゝる知識から出發したものと解し得ることになるであらう、成分の上から此の種利器の鑄造の時代に、鉛を加へて銅の熔融點を低下せしめ、また錫に代るに鐵と砒素とを以て純銅の固さを强める化學的知識のあつたことを推し得るとせば、例へその器は錫を含まないとしても、それのみを以て直ちに石金過渡期の場

合の如き低い文化段階の所産となし難くなる。此の事はそれと並んで實用の利器に青銅製品を存し、形式上これが先行するに於いて一層明であつて、かゝる成分から成ることが時代相の問題ではなく、特殊の事情に依り單に錫を用ひなかつたと解すべく器の明器である點や支那の中原に錫の產出の少いことなどがそれと緊密な關係に立つものと思はれるのである。

更に此の場合注目に値する一つの點は、鐵が夾雜物としてではなく、特殊の目的で加へられたとする解釋から、ひいて當代既に鐵に關する知識のあつたのを想定せしめる點[8]とする。既に擧げた如く、これは鉛と違つて分量が一パーセント內外であり、別に海外に於ける相近い成分のもの等からして、如上の解釋にはなほ議論の餘地があるべく、いまはそれに基くつき進んだ立論を差控へるのが穩當であるかも知れぬ。併し私の囑目した三代の標式的な尊彝のうちに、時に多量の鐵銹が附着して、もと鐵器との併存を考へしめるものがあり、また同じ尊彝の所謂型持ちに鐵を使用した例があるのに併せ觀て、鐵の使用が從來一般に考へられてゐるよりも更に遡るものがあつたとすることは全然あり得べからざるものとは思はれない。支那に於ける古代鐵の使用の問題は將來此の方面から新たな展開を示す如く吾々には期待されるのである。

【註】

① 第一項註④の道野鶴松氏の二論文並に同氏「化學上より見たる古代支那の金屬と金屬文化とに就いて」(『東方學報』東京第四冊)參照。

② 梅原「化學上より觀た支那の純銅器時代の確認に就いての疑問」(『史學』第十三卷第一號)參照。
③ 濱田博士「一二の銅鐸及銅鉾の成分に就て」(『考古學雜誌』第八卷第六號)及同博士『通論考古學』序論第三章參照。
④ 此の支那古銅器の化學的研究は著者の東方文化學院京都研究所に於ける最初の研究題目たる『支那古銅器の考古學的研究』と連關して、同研究所の援助の下に着手したものであるが、後羽田博士の厚意に依つて日本學術振興會の補助を受け、引續き業を進め得ることになつたのは研究に關與するものゝ感謝する所である。本題も論及する所の銅利器の調査は振興會の援助に依る第一年度の成績の一部である。こゝに註記して負ふ所を明にする。
⑤ 註①後段『東方學報』所載の論文中の表參照。
⑥ 近重博士『東洋錬金術』及び註②の論文一七頁の表參照。
⑦ 此の項山内淑人博士の教示に基く。なほ鉛を加へることに依つて純銅の鎔融點の下る度分の表は註②の文に載せて置いた。
⑧ 道野氏の分析した明器と思はれる利器形乃至裝飾化の著しい所謂純銅品五例中の四例がまた一以上三パーセントに近い鐵分を含んでゐる。註①參照。

一〇

化學成分から考へられる銅利器の性質が、從來一部人士の思考した如きものでないこと、前段に述べた如くであるとすると、考古學上から新たに導いた上記の支那の青銅器時代觀は、それに依つて別個の據所を加へより妥當性を增すことになる。いま上來の論旨を要約するならば、尊彝を以て時代の表徵と見て、それから直ちに青銅器時代を考へるのは不充分であつて、其の初に來る最も特色ある尊彝と並存したと認む可き裝飾化したもの乃至明器となつた銅利器の形から推すと、その以前に實用の利器の行はれた時代があつたとすべく、青銅器時代なるものは先づ右の時期に於ける利器の特殊な發

展に依つて特色づけられ、それがやがて次の銅容器の製作を導いたものと解せられるのである。然らば尊彝の出現は第二の段階に屬するわけであつて、現存の知見からすると殷墟の示す時代は第一第二の過渡の時期に相當ることゝなる。

さて右の歸納から進んで支那の青銅器時代の性質に關する若干の推測を試みるに當つて、現在據るべき一の方法は、古代文化世界に於ける既に確められた同代の知見に基く類推である。既に擧げたハルスタット・エトルスキ、高加索等の青銅製品の豐富な地方の實際に徵するに、容器をはじめとして利器以外の銅製品の盛なる製作は孰れも純然たる青銅器時代に於てではなくて、次の鐵器時代に入り銅の產出量の豐富となると共に、利器の質料としてより效果的な鐵の知られた時期に屬してゐる。支那の場合また同樣であつたと見れば、其の眞の青銅器時代は尊彝出現以前となる。上述明器樣の或種の銅利器の成分から中間代既に鐵の知識があつたとする推測は此の解釋に向つて重要な據所を與へるものである。併し乍ら他面に於いて、尊彝出現の當初に既に或種の利器が形式化して實用から遠ざかつたものを生じたとは云ひ乍ら、戈の如きは、現存の所謂古式から特色ある戈形を經て戟に至るまでの銅利器としての引續いた形式の發展があり、また別に矛、劍等の尊彝と並存した銅利器もあるから、支那にあつてはそれと違つた特異な場合を想定することもまた固より理由なしせとない。この樣に解すると、それは北歐瑞典の青銅器時代の狀態にやゝ似たものとなつて、尊彝の出現を以て同時代を前後

の二期に分ち得ることになる。當代遺跡に對する基本的調査の絶無な支那考古學の現狀に於いて、二者の孰れが是なるかはすべて將來の問題と云ふ外ないが、たゞこゝで重ねて記して置きたいのは、戈・戚等の特色ある利器が現在四隣の古文化國の孰れにも見出し難い點は、石器の類からこれに至る器形發展が古代支那の地域に於てなされたとする解釋の動かないと云ふことである。換言すれば此の銅利器の特殊な發達が支那の青銅器時代の獨自性を示すと共に、やがてまた特色ある尊彝出現の背景をなすとも言ひ得るであらう。而してそれから引いて、かゝる時代の長さは今日なほ計出する據所はないとしても決して短くなかつたとする推測をも加へしめることにもなるのである。

支那古代の銅利器にその土地に於ける發達と見る可き特殊なものがあるとすると、其の青銅器時代の性質觀は、更に銅乃至青銅なる知識が果して此の國に於いて發明せられたものであるかどうかの點に觸れることになる。此の問題は非常に重要な意味を持つものであるが、そのものゝ性質上孰れの國の場合でも考察に困難を伴ふ。されば考究の上に必要な資料の殆んど絶無な支那にあつては一層其の感が深い。一體支那に於ける古代の鑛產に就いては『禹貢』をはじめ文獻上に少なからず散見してゐるが、其の纏つた調べなり、また歷史的な沿革などは殆んど究められて居らず、なほ現在の鑛產と往古のそれとの關係なども將來の問題に遺されてある。たゞ吾々の狹い見聞からすると現在での銅鑛は割合に廣く支那の各地に分布してゐるが、併し錫と共に其の主要產地は主として南方にあつて、雲南・貴

州の方面に著しく、古代文化の中心地だつたと考へられる――この地域に就いては現在なほ明確にし難い點を含んではゐるが――黃河の流域にこれを見ない樣である。して見れば漢代に著名な丹陽・徐州などの銅山が更に古くから知られてゐたとしても、銅錫の合金に關する知見が、錫の手近にない地域に於いて自ら發明せられたと考へることはふさはしくない感がする。而してそれは同時に青銅の知識を外から得たとする想像を導くものである。

かゝる想察に連關して新たに考に浮んで來るものはアンダーソン博士の發見に依つて有名となつた支那史前の彩色土器の性質觀であつて、それがまた同時に近東諸國の青銅器時代初期の文物の趨勢に關係を持つものでもある。彩色土器の問題は事新しく述べるまでもなく、支那史前の研究に向つて一新紀元を劃したもので、それは從來知られた同代を特徵づけてゐる黝黑色の鬲形乃至豆形等の土器と性質上に明白な差異を示す所の精良な作りの器の上に鮮かな彩文を施してゐて、廣く近東諸國から、黑海の沿岸の一部、中亞等に分布する彩文土器との間に親緣關係の考へられる所の興味の多い遺品である。アンダーソン博士は此の種土器の發見に依つて、史前の時代に西方文物の支那への波及を說き、近東其他の遺物の示す年代から類推して支那のそれを以て紀元前三千年代のものと斷じ、甘肅發見の同式土器に於いて更に其の詳しい編年をも組立てゝゐるのであつて、博士の此の說は今や廣く世に行はれてゐる。右の見解特に現實に氏が見出した各地の彩文土器の編年なり、一々の年代說に就いては、

首肯し兼ねる點を含んでゐるが、それは兎も角として、二種の性質の違つた土器の並存に對し、一方が支那的であることが認められる以上、他の彩文土器が違つた系統として、相似た西方の同種土器との連鎖を考へることは自然な見方であり、引いて早く西方の文物の支那へ波及したとする大體の觀察は誤らないであらう。處が此の場合右の西方諸國の彩文土器を出す遺跡の性質如何を省みると、大體に於いて石器時代の末期から金屬器出現の時代に亙つてゐて、恰も銅使用の初期に相當するのである。然らば支那に於ける銅乃至青銅の知識の基く所を以て此の彩文土器の東漸と結びつけて考へることがまた許されて然るべきであると思ふ。

舊大陸に於ける青銅の起源の問題は今日なほ充分に解決されてゐない樣であるが、それが銅と錫との合金である以上、兩者の並び產する地域に於いて、氣付かれたものとするのが穩當であり、其の點でボヘミア等が現在の知見から一の候補地として數へ得るかも知れぬ。他面また此の知識は必ずしも一の起源から發したとする要もない。併しこれを近時の近東考古學の進步の齎した結果からすると、「光は東方より」の諺の如くエーゲ文化埃及の文物等は近東諸國を通じて兩河の流域に於いて、既に或程度の銅文化の發達を示したものゝ西漸であると考へられるふしがある。從つて其の文物の起源を辿るとなると更に東若しくば東北に求めなければならぬ。近時モヘンジョダロの遺跡を首とする印度の古文化の示すところ乃至中亞のなほ閉された地域に學者の關心するのはかゝる關係からで、その

上に期待が掛けられてゐるわけである。西方の彩色土器は大體から見て右の初期の銅文化と交渉する所があるとすれば、前段の推測はまた推し廣めて兩河流域から西した文物と支那の青銅文化の基く所の一元說をも組立て得ることになる。

支那に於ける青銅の知識の起源に關する推測は、屋上屋を重ねて遂に如上の假說を得たが、これに就いては私自らも今日それを强て主張せんとするものではない。併し銅の知識を一元と見て、それの知識が一方は東に流れ、他方は西して、それ〴〵前代に特殊の文物のあつた素地の上に、その文化を發展させたと見ることに依つて、近東の文物と支那の青銅器のそれとの差異が了解せられるのであり、特に利器の上に表はれた特殊性が意味を持つことゝ思ふ。此の場合別に近東の遺跡の年代の古く紀元前三千年に遡るとする推測からして、支那の古代の年代が餘りに古くなり過ぎるとの非難が出るかも知れぬが、これとても殷後半を以て石金併用期等とする見方とはかけ離れるが、前述の如く同代既に鐵の知識があつたと考へられ、特色ある銅利器が裝飾化して、一部に其の明器を生ずるの段階に達し、また他に比類のない尊彝が出現したものであつたとすれば、それ等の依つて來る發展の過程に右に近い年代を想定することも固よりあり得ないことではなからう。支那古代の文字の發達並に當代に於ける特殊な思想の發展なども亦この肯定の背景となり得ると考へる。されば私はいま銅利器乃至尊彝から出發した支那考古學上青銅器時代に就いての一の大膽な推測として、思ふまゝに記してこれを學界

に提出して批判を願ふことにする。其の當否は云ふまでもなく支那考古學の將來に於ける主要な問題の一として、考察が重ねらるべく、かくして漸次光明に近づくことに特に期待を懸けるのである。